

れき じん

となん歴民だより vol.28

Morioka tonan history and folklore museum

平成23年9月30日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL/Fax 019-638-7228

企画展「盛岡藩・志和稲荷街道を巡る～街道の昔と

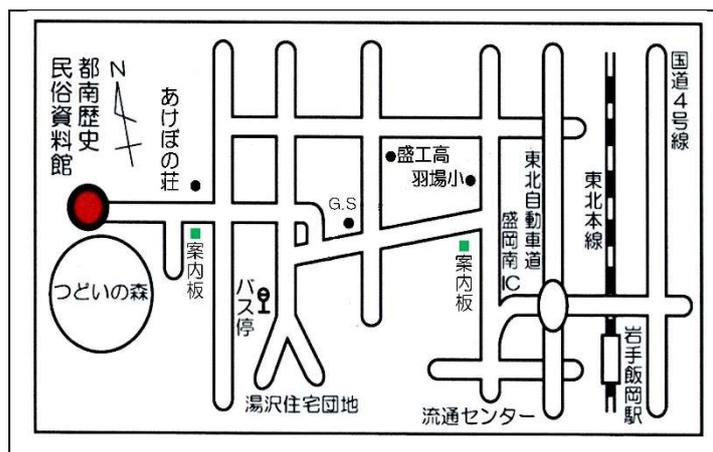


是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

- ・〈特別寄稿〉
工藤利悦「志和稲荷と稲荷街道」
- ・もりおか歴史文化館紹介
- ・市民参加展報告
- ・資料は語る㊗
- ・盛岡市所在
指定・登録文化財紹介㊗
- ・とんの昔ばなし㊗

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
年末年始

志和稲荷と稲荷街道

近世文書研究所 主宰 工藤 利悦

紫波町升沢に鎮座まします志和稲荷神社は、江戸時代は稲荷宮・大稲荷等と称され、伝によれば、安倍頼時を討つためこの地に来た源頼義が天喜5年（1057）に勧請した社である。後、正平年間（1346～70）に斯波家長が社殿を修築。以来、斯波家の祈願所として代々の崇敬を受けた。天正16年（1588）、斯波詮直は本殿を再建（棟札銘）しているが、同年、26代南部信直により滅亡を余儀なくした。新領主信直は旧主を慕う新領民のために、社寺の保護や郡名斯波郡を志和郡と改めるなど、撫循に意を尽くした。

慶長4年（1599）、信直没後を継いだ27代利直は、稲荷宮を参詣。神前で別当手作高を寄附（「御領分社堂」）すると共に、斯波家に代わって南部家の祈願所とした。次いで慶長17年（1612）には社領20石を寄附している。爾来、稲荷宮に対する歴代藩主の崇敬の念は厚く、延宝2年（1674）及び宝永7年（1710）に両度の加増があり、社領35石とされた。また、再興修復、藩主社参・代参は時々行われている。ちなみに斯波氏時代の本地佛は未詳だが、「御領分社堂」は、南部家の信仰佛である十一面観音、神号を稲倉魂命（うがのみたまのみこと）と伝える。明治以降は宇迦御魂神（うがのみたまのみこと）と表記する。実は前神は「古事記」。後神は「日本書紀」の表記で同一神。別名を御饌津神（みけつかみ）と言い、「天下泰平国家安全五穀豊穰武運長久子孫繁栄息災延命万民豊楽牛馬に至るまで無事」の神（「御領分社堂」）として信仰されて来た。

時代が降って、文政5年（1822）9月に実施された利用の社参記録「藩主城内其他出入規式古実」によれば、参詣の道筋を「御庭口より鍛冶屋御門・上衆小路・六日丁・穀丁・川原丁・仙北丁、夫よりかつ窪、此処より村古人御先立申上、中道え御懸り、寺前より志和成就院え入らせられ、御駕籍を御成座鋪御縁へ横付也」と伝える。中道は、現在は主要地方道盛岡和賀線となっている。帰りは郡山御仮屋御垣之下に小休の後、「郡山より御提灯にて御帰被遊候処、村々より百姓ども罷出、御行列之御先・御跡え松明振候て御送申上之」とある。帰途は現国道四号線を北上したと知られる。

文政9年（1826）9月の時は往路復路ともにほぼ同じ。稲荷宮と郡山御仮屋間の記述は「陣ヶ岡之辺より御馬召しなされ、蒲ヶ渾」里小屋之処より郡山え御出、御仮屋にて御小休」。

図らずも、「篤焉家訓」十三之巻 往昔之往還の項に次の一文がある。これぞ利直が辿った参詣への道筋。はたまた、利直の時代、江戸への街道筋だったことを彷彿させる。

今志和稲荷宮の近辺に道祖神と云碑あり、或書に、今の志和稲荷宮は志加里和気の社にて、道祖神也、鹿渡の諏訪の神同断、往還道知るべ（標）の神也と云、又云、往還は花牧より西山根志和へ出、夫より山根通中野え出て渡を越、鹿渡へ出て神子田より上小路へかかり、里東顕寺前より今の馬道に出て尾崎社の前より曲り、天神の脇道より妙泉寺後を通り、春木場の川を越、阿弥陀堂より関口へ通るといふ、郡山より津志田迄は別て曲道多き道に付、今の直道（すぐみち）に御直しなされ候は、明暦年中、重直公御代也、

現国道4号線（江戸道・花巻道・奥州道中などの呼称があった）は、28代重直の代、明暦年間（1655～58）に「郡山より津志田迄は別て曲道多き道に付」新設された街道であったこと。37代利用参詣の道は、奇しくも「篤焉家訓」が記述する、往昔之往還と、ほぼ同一視できるなどから勘考した仮説である。

一方、志和稲荷神社が所蔵する「稲荷街道絵図」が伝える稲荷街道は、現在言われている稲荷街道であるが、天保5年（1834）10月に志和稲荷山道として新規に開盤（一部修復）され、翌6年に完工した街道である（志和稲荷山道通御普請扣帳）。起点は、江戸道中津志田一里塚（四高付近）から分岐する箇所。「稲荷街道絵図」によれば、赤鳥居があり、終点は志和稲荷宮。この間、42丁一里制（一里4.582km）で、延長3里18丁（約15.7km）と見える。赤林・和味・水分の3ヵ所に一里塚が建設されて現存する。また、赤林付近から稲荷宮まで松並木が敷かれ、管理は厳重であった。

松並木は昭和30年代まで面影を伝えていたが、現在は、かつて岩崎小休所が所在した付近に一部残存するのみ。殆ど伐採された。村々から動員された人足は延べ30,500余人、馬延べ2,770疋。工事費562両。5月7日竣工見分し同月9日に利済の参詣を見ている。

実は、この時の普請は天保大飢饉の最中で、38代利済が百姓救済のために私費（内幣費）支弁。一里塚建設など一部が村方供出による事業であった。「志和稲荷新道切披御用書」に、支給人夫賃1日1人80文宛などの記述が見える。利済の善徳は、藩主参詣時には、農作業中の百姓は手を休めること不必要（「御家被仰出」天保8年5月17日条）とする布告、その他などでも知られている。

🏛️もりおか歴史文化館🏛️

もりおか歴史文化館は、「もりおか・城と城下町フィールドミュージアム」をコンセプトに城下町盛岡のルーツを探り、21世紀のまちづくりへつなげる拠点施設として整備され、平成23年7月1日に開館しました。もりおか歴史文化館の建物は、平成17年11月まで岩手県立図書館として使用されていた建物を全面改装しています。これは、「今世紀を創った世界建築家100人」に選ばれた建築家菊竹清訓の設計です。岩手山をイメージされた特徴的な屋根の上には、伸びゆく岩手の文化を象徴した「ふたば」（岩手県出身彫刻家船越保武作）の屋根飾りがあります。

また、もりおか歴史文化館は盛岡藩の資料を中心に城下の歴史・民俗を展示しています。是非、一度足を運んでみてはいかがでしょうか。



＝もりおか歴史文化館 10月のイベント情報＝

- ・昭和の遊び体験（10月29・30日）
- ・秋祭りの熱気再び!!盛岡山車太鼓打ち体験
 &民俗芸能公演（10月30日）
- ・もりおか歴史文化館 芸術の秋
 音楽鑑賞会（11月3日）

11月以降のイベント情報は直接もりおか歴史文化館（下記）にお問い合わせください。

＝もりおか歴史文化館ご利用案内＝

休館日 毎月第3火曜日（祝・休日の場合は翌日）12月31日～1月1日

入館料（2階歴史常設展示室のみ）

	個人	団体（20人以上）
小・中学生	100円	80円
高校生	200円	160円
一般	300円	240円

問い合わせ先 〒020-0023 岩手県盛岡市内丸1番50号

TEL 019-681-2100 FAX 019-652-5296

交通 JR 盛岡駅下車 徒歩20分

バス「県庁・市役所行」「盛岡城跡公園」下車 徒歩4分

「盛岡バスセンター」下車 徒歩5分

盛岡IC・盛岡南ICから 車25分（尚、車利用の場合「盛岡城跡公園地下駐車場（有料）」をご利用ください）



☆市民参加展報告☆

平成23年7月3日から8月28日まで開催いたしました「鎌田隆コレクション 昭和のうつわ展-昭和30～40年代を中心に-」には、多くの方にご来館いただきました。誠に有り難うございました。また、展示にご協力頂きました鎌田隆様に紙面をかりまして、改めてお礼申し上げます。

資料は語る⑳



狩野存信画

狩野存信は明治から大正にかけての狩野派絵師です。父休意は、盛岡藩御抱絵師（狩野派）の絵師でした。

存信は、明治14年（1881）に休意の跡目を相続し、同37～42年（1904～1909）まで岩手県高等女学校の嘱託を務めます。その後、遠野・東京と居を移し、絵を残します。休意・存信の墓は盛岡市法華寺にあります。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介㊸



玉山館

玉山区玉山字城内地区、東楽寺の北東にある居館で、張り出した丘陵の先端部に築かれています。館は深い堀を隔てて大館・小館と呼ばれる2つの郭を中心に構成され、周囲には帯状の曲輪が配されています。大館は東西70m、南北約110mの規模で上から見ると台形の形をしています。また、北側にある小館は東西25m、南北約40mの三角形の形をしており、大館と小館は空堀で区画されます。玉山館は戦国末期まで玉山氏の居館として機能し、文治5年(1189)奥州合戦の功勞により、現在の紫波郡一帯を治めた河村氏の一族でもある河村小三郎直秀を祖とします。盛岡城築城後は破却され、玉山氏は城下に移住したと伝えられます。南部家との関係も深く、玉山兵庫秀久の娘おしゅんの方は盛岡藩第4代藩主重信の奥方で、5代行信の実母でもありました。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

となんの昔ばなし二十八

『坊主子堤』

三本柳の畑沼の北に土手があり、坊主子堤と言っている場所があります。藩政の頃に、北上川の洪水を防ぐためにできた堤防ですが、そのころとしては大きい工事で煙山、不動方面からも人夫がきて村の普請をしたといえます。

大工事でもあるし、また出水がある度に流されるものだから、堅固にするために人柱を立てる方がよいということになりました。たまたま、そこを通りかかった旅の僧があつたので、その僧を捕らえて否応なしに人柱にしてみました。無情なことでしたが、村を救うためにはよんどころない仕業と思つたのでしよう。工事が完成してからこの堤防の名を「ぼうず子どて」と呼ぶようになったそうです。

出典：『都南の民話』（都南歴史民俗資料館、一九八八）。